

平成25年度 小学校からの教科専門性向上事業 実施報告書

教育委員会名

高山市教育委員会

1 学力向上チャレンジ校名・責任者氏名

ふりがな	しょうかわしょうがっこう	ふりがな	ひらた まこと
学校名	荘川小学校	校長氏名	平田 誠

2 取組内容

(1)組織・指導体制に関わる取組内容

本校は、6学年単学級、特別支援2学級の計8学級で、職員構成は、校長、教頭、教員8名、講師1名、小中兼務教員2名、養護教諭、事務職員、用務職員の計16名である。

指導部会は2部会からなり、学習を頭づくり、生活を心づくりとして進めており、本実践については、別に研究推進委員会を設置し、研推委員長と4名の教諭、校長、教頭の7名を中心とした組織で取り組んでいる。

本実践のねらいを達成するために、

- ・研究内容1「小中連携を生かした、教科担任制等を活用した効果的な指導体制の工夫」
- ・研究内容2「教科専門性を生かした教員の指導力向上と児童の学力を高める取組」

の2点を中心に実践を行った。

そこで、高学年における教科免許を所有する教員・小中兼務教員によるTT授業を算数と外国語活動で行い、音楽免許を所有する教員による全学年の音楽授業を行う時間割を編成した。つまり、学級担任が中心に行う授業の時間割に教科免許を所有する教員とTTで指導にあたることで、教員の指導力の向上と児童の学力の向上を目指す指導体制を編成し本事業に取り組んだ。

(2)運営(組織・計画の運用)に関わる取組内容

算数では、学級担任と小学校の算数免許を所有する教員で、放課後に事前の打ち合わせと授業の振り返りを職員室で行った。課題解決につながる数学的な考え方や児童のつまずきに対する手立て、そして児童が課題解決に使った数学的な考え方を明確にするために、どのような発問をしたら、児童がその数学的な考え方に気付くか、意識できるかを考えて、深めの発問について話し合っている。中学校の免許を所有する教員とは、授業の前後の短い時間ではあるが、どのような授業展開をするか、どこでどのような出場を作るかなどのポイントを簡単に職員室や教室で打ち合わせをしている。

外国語活動では、中学校英語免許を所有する小中兼務教員・学級担任・ALTが指導を行い、英語でコミュニケーションする意欲を高める学習内容や、児童が楽しんで学習できる学習形態や言語活動について、学級担任に週1時間の授業前の休み時間にアドバイスし、児童が無理なく英語に慣れ親しむことができる授業づくりが行えるようにしている。

音楽では、音楽免許を所有する教員の「フクロウの声の指導」によって、話の声と歌の声を切り替えて歌う子どもの姿や、「ふしづくりの学習における拍打ちの指導」によって、等速間を身に付けていく子どもの姿から、免許を所有しない教員が、その指導を取り入れて実践する姿が見られるようになった。普段の授業ももちろんのこと、特に、音楽会に向けた取り組みの全校音楽の時間は、その指導方法を教員もともに学ぶ機会となった。より専門的な技術をもった教員の的確な指導が児童の能力を高めることはもちろん、他の教員の指導力を高めることに効果的にはたらく取組となった。

(3)カリキュラム・指導方法等に関わる取組内容

研究推進委員会のメンバーで、授業展開や話し合い活動の進め方、そして深めの発問について検討してきた。単元指導計画や学習過程の展開を考えると、いつも「何について考え」「何を身に付けさせ」「どのような数学的な考え方に気付かせ」「どのような活動をするか」を大切に考えてきた。また、本時のねらいには、「気付かせる数学的な考え方」、展開に「深めの発問」を書き入れた指導案を作成し、授業に臨むようにしている。さらに、課題解決につながる数学的な考え方を明確にするための「深めの発問をする」ことや、学習意欲を高めるために「学習した内容が次のどのような内容の学習につながるかを子どもに伝え、興味・関心を持たせる」ことを大切に授業づくりを進めている。その他、中学校の数学ノートを参考に、中学校の数学と小学校の算数のノートで共通して記入することとして、課題やまとめを赤や青の線で囲むこと、そして、ノートの使い方や小中連携で進めている話形を使った発言の仕方など、中学校で目指す姿を共有して指導に当たってきた。そして、児童の実態を把握して、中学校へ行っても安心して学べるように取り組んできた。

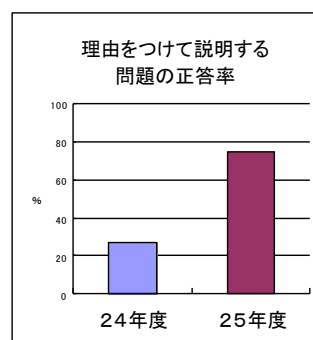
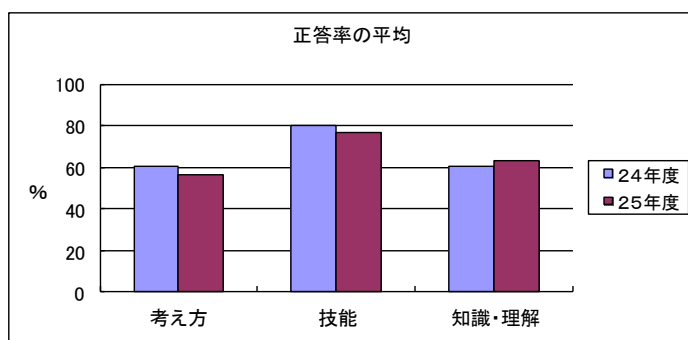
(4)教員研修に関わる取組内容

算数を研究の柱として取り組み、研究推進委員会を中心にしてどのような授業を行うとよいか、年2回の全校研究会を核として、隔週の授業公開を行ってきた。全校研究会では、全員が公開授業を行い、授業の質の向上を目指して取り組んできた。またこれを小中の全職員で合同の研究会として行うことで、小中の教員が共通の意識をもち、今後の取組に生かすことができるようにしている。

3 成果

(1)児童の学習状況に関わる成果

11月に5年生対象に県の学習状況調査を算数だけ実施したところ、考え方にに関する正答率の平均は56%、技能に関する正答率の平均は76%、知識・理解に関する正答率の平均は、63%と平成24年度4年生時の実施結果とあまり変化はなかった。しかし、「理由をつけて説明できる。」という問題の正答率が、平成24年度は27%だったものが、平成25年度には75%となり、本校の児童の課題であった「学習内容を正しく理解して、考え方や理由を説明する。」という思考力・判断力・表現力が少しずつ高まってきていることが分かる。



さらに、学習状況調査以外でも、次のような望ましい傾向が見られた。

- ①算数の授業では、算数の言葉を使って、根拠をはっきりさせて話す児童が増え、算数の学習が分かり、進んで取り組む児童が増えた。
- ②外国語活動に楽しみながら進んで取り組む児童が増え、自信をもって大きな声で英語を話す児童が増えた。
- ③音楽の学習に進んで取り組む児童が増え、歌声の発声の仕方や息の吸い方など専門的な技術を身に付けた児童が増えた。

(2) 教員の意識等に関わる成果

学級担任は、数学免許を所有する教員とともに、算数の授業について考えてきたことによって、算数の用語の正しい使い方の指導の在り方について理解が深まった。また、教科書に書いてある考え方のどこが大切なのかを知ることができ、さらにどのように授業を行うか見通しを持って授業を進めることができるようになった。また、単元指導計画や学習過程の展開を考える中で、単位時間の評価規準を自分で考えて決めることや授業の中の活動や教材の意味などが理解できるようになった。そして、単位時間で児童に付ける力もはっきりしてきた。

(3) 保護者の意識等に関わる成果

5、6年生の算数や全校の音楽の授業を、教科担任制で行っていることはよいと答える保護者が98%、「教科担任制を実施している教科の学習意欲は高まっている。」と、回答した保護者は100%であった。このアンケート結果から、保護者の教科担任制に対する期待は大きいことが分かる。

(4) その他の成果

教科担任制等を活用した効果的な指導体制について、児童や保護者の意識の変容をつかむために5月と11月に5・6年生を対象にアンケートを実施した。その結果は次のようである。

<6年生>

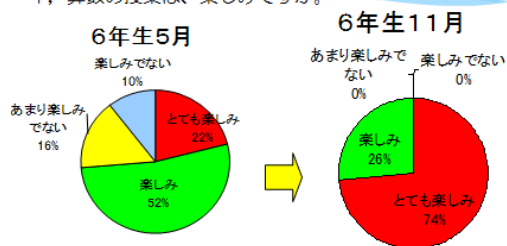
- ① 算数の授業は楽しみ。 5月、74%→11月、100%
- ② 算数の勉強を分かりやすく教えてくれる。 5月、95%→11月、100%

<5年生>

- ③ 算数の勉強を進んでやっている。 5月、58%→11月、100%
- ④ 算数が得意になった。 5月、58%→11月、92%

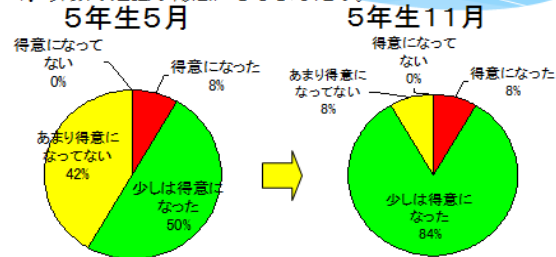
◇教科担任制についての意識調査結果
及び児童の学力の変容について
児童の算数の授業に対する意識調査

1. 算数の授業は、楽しみですか。



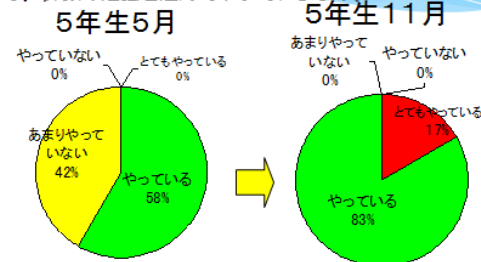
◇教科担任制についての意識調査結果
及び児童の学力の変容について
児童の算数に対する意識調査

4. 算数の勉強が得意になりましたか。



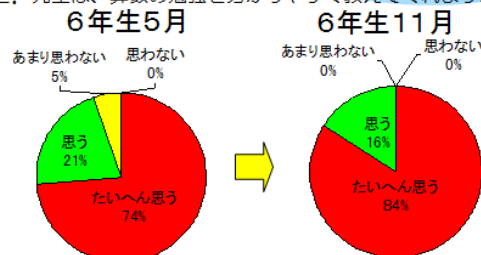
◇教科担任制についての意識調査結果
及び児童の学力の変容について
児童の算数に対する意識調査

3. 算数の勉強を進んでやっていますか。



◇教科担任制についての意識調査結果
及び児童の学力の変容について
児童の算数の授業に対する意識調査

2. 先生は、算数の勉強を分かりやすく教えてくれますか。



これらのアンケート結果から、数学の免許を所有する教員および小中兼務教員が算数の授業を行うことによって、算数の学習に対する児童の意欲が高まり、算数が得意になったと感じる児童が増えていることが分かる。

そして、6年生で、5月の時点で算数の授業が得意でないとアンケートに答えていた児童に変容があった。普段の授業でも支援が必要な児童が単元テストにおいて正答率がクラスの平均に近付くと同時に、算数の授業が「楽しみでない」から「とても楽しみ」へ、「得意でない」から「あまり得意でない」というように意識の変化も見られた。さらに

「最初は、算数がすごく苦手ですべてがわからなくて楽しくなかったです。でも、先生たちに授業を分かりやすく進めてもらったり、分からない時は最後まで教えてもらったりしました。

また、いろんな物を使ってヒントを出してもらったときもありました。それから、ものすごく悩んでいて答えがあっていた時や、みんなの前で発表したときに「すごい」って言ってもらえてうれしかったときもありました。そしてだんだん算数ができるようになり問題が解けるようになってきました。だからとっても楽しいです。」

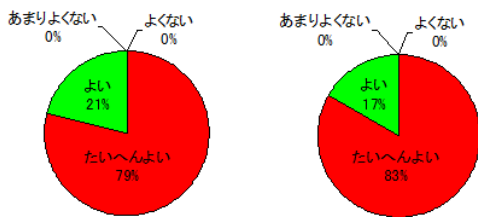
という授業の感想をもつようになった。

免許所有者が学級担任と一緒に授業をすることについても、「算数や英語で小中兼務の免許所有者の教員が授業を行うことはよい」と答える児童は、100%であった。さらに、音楽免許を所有する教員に音楽の授業を教えてもらうことにより、「専門の先生に教えてもらうと歌やリコーダーが上手になった」と答える児童が97%、「専門の先生に教えてもらうことで、進んで勉強したいという気持ちが高まった」と答える児童が90%という結果になった。

◇教科担任制についての意識調査結果
及び児童の学力の変容について
児童の算数や英語の授業に対する意識調査

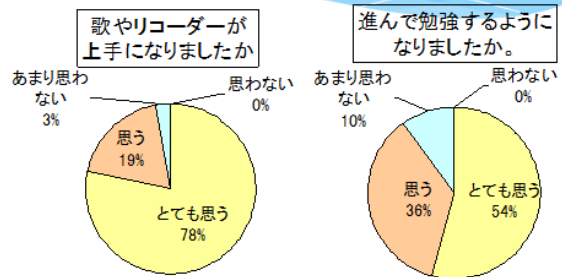
5. 中学校の専門の先生が授業を行うことはよいか

6年生 5月・11月同じ 5年生 5月・11月同じ



これらのことから、児童の学習意欲が高まり、学力が高まってきていると考えられる。

◇教科担任制についての意識調査結果及び児童の学力の変容について
全校児童の音楽の授業に対する意識調査
音楽免許を所有する教員が
音楽の授業をおこなうことによって



4 次年度以降の見通し

本校の規模では、全ての教科の免許をもつ教員が配属されるとは限らない。その年度の中で、できる限りの専門性を生かした指導体制づくりを考えなくてはならない。今年度のように、小中の連携を密にして、小中の職員の交流を図り、小中兼務職員を生かした指導体制を考えていきたい。

また、今年度は算数・音楽・外国語活動の専門性向上に取り組んだが、全ての教員のもつ専門性を積極的に活用して学校の力としていくことが必要である。

例えば、

研究内容1の「小中連携を生かした、教科担任制等を活用した効果的な指導体制の工夫」では、

- ①他教科でも免許を所有する教員が、高学年の教科担任として授業を受け持つなどして、今年度よりさらに教科担任制を充実させる。
- ②その対象を小学校の教員だけでなく小中兼務職員を増やすことで教科担任制を充実させる。

研究内容2の「教科専門性を生かした教員の指導力向上と児童の学力を高める取り組み」では、

- ①教科の免許所有者の教員が中心になって授業についての講習会を行う。
- ②積極的に授業を自主公開してミニ研究会をするなどして授業力を向上する。

いずれにせよ、これらは小中の教員が連携して取り組むことでさらにその幅を広げることができる。より小中の連携を一層深めて、教員の専門性を生かしたり伸ばしたりして、児童の学力を高めていきたいと考えている。